

インドラの網

宮沢賢治

青空文庫

そのとき私は大へんひどく疲れていてたしか風と草穂との底に倒れていたのだとおもいます。

その秋風の昏倒の中で私は私の錫いろの影法師にずいぶん馬鹿ていねいな別れの挨拶をやっていました。

そしてただひとり暗いこけももの敷物を踏んでツエラ高原をあるいて行きました。

こけももには赤い実もついていたのです。

白いそらが高原の上いっぱいには張って高陵産の磁器よりもつと冷たく白いのでした。

稀薄な空気がみんな鳴っていましたがそれは多分は白磁器の

雲の向うをさびしく渡つた日輪がもう高原の西を劃る黒い尖
々の山稜の向うに落ちて薄明が来たためにそんなに軋ん
でいたのだらうとおもいます。

私は魚のようにあえぎながら何べんもあたりを見まわしました。
ただ一かけの鳥も居ず、どこにもやさしい獣のかすかなけはい
さえなかつたのです。

(私は全体何をたずねてこんな気圈の上の方、きんきん痛む空
気の中をあるいているのか。)

私はひとりで自分にたずねました。

こけももがいつかなくなつて地面は乾いた灰いろの苔で覆われ
ところどころには赤い苔の花もさいていました。けれどもそれは

いよいよつめたい高原の悲痛を増すばかりでした。

そしていつか薄明は黄昏に入りかわられ、苔の花も赤ぐろく見え西の山稜の上のそらばかりかすかに黄いろに濁りました。そのとき私ははるかに向うにまっ白な湖を見たのです。

(水ではないぞ、また曹達や何かの結晶だぞ。いまのうちひどく悦んで欺されたとき力を落しちやいかないぞ。) 私は自分で自分に言いました。

それでもやっぱり私は急ぎました。

湖はだんだん近く光つてきました。間もなく私はまっ白な石の砂とその向うに音なく湛えるほんとうの水とを見ました。

砂がきしきし鳴りました。私はそれをつまみとって空の微光

にしらべました。すきとおる複六方錐の粒だったのです。

(石英安山岩か流紋岩から来た。)

私はつぶやくようにまた考えるようにしながら水際に立ちました。

(こいつは過冷却の水だ。氷相当官なのだ。) 私はも一度

こころの中でつぶやきました。

まったく 全く私のこのひらは水の中で青じろく燐光を出していました。

あたりが俄にきいんとなり、

(風だよ、草の穂だよ。ごうごうごうごう。) こんな語が私の頭の中で鳴りました。まっくらでした。まっくらで少しうす赤かったのです。

私はまた眼を開きました。

いつの間にかすつかり夜になってそらはまるですきとおつてい
 ました。素敵に灼きをかけられてよく研かれた鋼鉄製の天の野
 原に銀河の水は音なく流れ、鋼玉の小砂利も光り岸の砂も一
 つぶずつ数えられたのです。

またその桔梗いろの冷たい天盤には金剛石の劈開片や
 青宝玉の尖った粒やあるいはまるでけむりの草のたねほどの
 黄水晶のかけらまでごく精巧のピンセットできちんとひろわ
 れきれいにちりばめられそれはめいめい勝手に呼吸し勝手にぶ
 りぷりふるえました。

私はまた足もとの砂を見ましたらその砂粒の中にも黄いろや

青や小さな火がちらちらまたたいていた。恐らくはそのツエラ高原の過冷却湖畔も天の銀河の一部と思われました。

けれどもこの時は早くも高原の夜は明けるらしかったのです。

それは空気の中に何かしらそらぞらしい硝子の分子のようなものが浮んできたのでもわかりましたが第一東の九つの小さな青い星で囲まれたそらの泉水のようなものが大へん光が弱くなりその空は早くも鋼青から天河石の板に変わっていたことから実にあきらかだったのです。

その冷たい桔梗色の底光りする空間を一人の天が翔けているのを私は見ました。

(とうとうまぎれ込んだ、人の世界のツエラ高原の空間から天の

空間へふつとまぎれこんだのだ。―私は胸を躍らせながら斯う思
いました。

天人はまつすぐに翔けているのでした。

（一）瞬百由旬を飛んでいるぞ。けれども見ろ、少しも動い
ていない。少しも動かずに移らずに変わらずにたしかに一瞬百由旬
ずつ翔けている。実にうまい。―私は斯うつぶやくように考えま
した。

天人の衣はけむりのようにうすくその瓔珞は味爽の天盤
からかすかな光を受けました。

（ははあ、ここは空気の稀薄が殆んど真空に均しいのだ。だか
らあの繊細な衣のひだをちらつと乱す風もない。―私はまた思

いました。

天人は紺こんいろの瞳ひとみを大きく張はつてまたたき一つしませんでした。その唇くちびるは微かすかに晒わらいまつすぐにまつすぐに翔かけていました。けれども少しも動かうごかず移うつらずまた変かりませんでした。

（ここではあらゆる望のぞみがみんな浄きよめられている。願ねがいの数はみな寂しずめられている。重じゆう力は互たがいに打うち消けされ冷つめたいまるめるの匂においが浮ふ動どうするばかりだ。だからあの天衣てんいの紐ひもも波なみ立たずまた鉛えんちよく直ただに垂たれないのだ。）

けれどもそのとき空そらは天てん河石がせきからあやしい葡萄瑪瑙ぶどうめのうの板いたに變かわりその天人の翔あける姿すがたをもう私は見みませんでした。

（やっぱリツエラの高原だ。ほんの一時のまぎれ込こみなどは結けつき）

局よく あてにならないのだ。〕斯こう私は自分で自分に誨おしえるように
 しました。けれどもどうもおかしいことはあの天盤てんぱんのつめたいま
 るめろに似にたかおりがまだその辺へんに漂ただよっているのです。そして
 私はまたちらつとさつきのあやしい天せかいの世界せかいの空間くわんを夢ゆめのように
 感かんじたのです。

（こいつはやつぱりおかしいぞ。天の空間は私の感かん覚かくのすぐ隣とな
 りに居いるらしい。みちをあるいて黄金うんもいろの雲母うんものかけらがだん
 だんたくさん出て来ればだんだん花崗岩かこうがんに近づいたなと思うの
 だ。ほんのまぐれあたりでもあんまり度たび々たびになるととうとうそ
 れがほんとなる。きつと私はもう一度いちどこの高原で天せかいの世界せかいを感
 ずることができ。〕私はひとりで斯こう思いながらそのまま立つ

ておりました。

そして空から瞳ひとみを高原てんに転てんじました。全く砂まつたすなはもうまつ白に見えていました。湖みずうみは緑ろくしやう 青せいよりももつと古びその青さは私の心しんぞう臓ぞうまで冷つめたくしました。

ふと私は私の前に三人の天の子こども供どもらを見ました。それはみな霜しもを織おつたような羅うすものをつけすきとおる沓くつをはき私の前の水みず際ぎわに立たつてしきりに東の空をのぞみ太陽たいやうの昇のぼるのを待まっているようでした。その東の空はもう白く燃もえていました。私は天の子供らのひだのつけようからそのガンダーラ系けい統とうなのを知りました。またそのたしかに于コウタン 大寺たいしの廢趾はいしから発はつ掘くつされた壁画へきがの中の三人すうなことを知りました。私はしずかにそつちへ進すすみ愕おどろかさないよ

うにごく声低く挨拶しました。

「お早う、于 大寺の壁画の中の子供さんたち。」

三人一緒にこつちを向きました。その瓔珞のかがやきと黒い厳めしい瞳。

私は進みながらまた云いました。

「お早う。于 コウタン 大寺の壁画の中の子供さんたち。」

「お前は誰だれ。」

右はじの子供がまっすぐに瞬もなく私を見て訊ねました。

「私は于 大寺を沙の中から掘り出した青木晃というものです。」

。

「何しに来たんだい。」少しの顔色もうごかさずじつと私の瞳を

見ながらその子はまたこう云いました。

「あなたたちと一緒にお日さまをおがみたいと思つてです。」

「そうですか。もうじきです。」三人は向うを向きました。瓔

珞は黄や橙や緑の針のようなみじかい光を射、羅は虹のように

ひるがえりました。

そして早くもその燃え立った白金のそら、湖の向うの驚いろの

原のはてから熔けたようなもの、なまめかしいもの、古びた黄金、

反射炉の中の朱、一きれの光るものが現われました。

天の子供らはまっすぐに立つてそつちへ合掌しました。

それは太陽でした。厳かにそのあやしい円い熔けたようなか

らだをゆすり間もなく正しく空に昇つた天の世界の太陽でした。

光は針や束たばになつてそそぎそこらいちめんかちかち鳴りました。
 天の子供こどもらは夢中むちゆうになつてはねあがりまつ青さおな寂じやく静じゆう印いん
 の湖の岸きし硅砂けいしゃの上をかけまわりました。そしていきなり私にぶ
 つつかりびっくりして飛とびのきながら一人が空を指さして叫さけびまし
 た。

「ごらん、そら、インドラの網あみを。」

私は空を見ました。いまはすっかり青ぞらにかわつたその天てんちよ
 頂うから四方の青白い天てん末まつまでいちめんはられたインドラのス
 ペクトル製せいの網、その纖維せんいは蜘蛛くものより細く、その組織そしきは菌糸きんしよ
 り緻密ちみつに、透明とうめい清せい澄ちようで黄金でまた青く幾億いくおくたがい互がいに交錯こうさくし
 光つて顛ふるえて燃えました。

「ごらん、そら、風の太鼓。」も一人がぶつつかかってあわてて遁げながら斯う云いました。ほんとうに空のところどころマイナスの太陽ともいうように暗く藍や黄金や緑や灰いろに光り空から陥ちこんだようになり誰も敲かないのにちからいっぱい鳴っている、百千のその天の太鼓は鳴っていないながらそれで少しも鳴っていないなかつたのです。私はそれをあんまり永く見て眼も眩くなりよろよろしました。

「ごらん、蒼孔雀を。」さつきの右はじの子供が私と行きすぎるときしずかに斯う云いました。まことに空のインドラの網のむこう、数しらず鳴りわたる天鼓のかなたに空一ぱいの不思議な大きな蒼い孔雀が宝石製の尾ばねをひろげかすかにクウクウ鳴き

ました。その孔雀はたしかに空には居おりました。けれども少しも見えなかったのです。たしかに鳴いておりました。けれども少しも聞えなかったのです。

そして私は本統ほんとうにもうその三人の天の子供らを見ませんでした。

却かえつて私は草穂くさぼと風の中に白く倒たおれている私のかたちをぼんやり思い出しました。

青空文庫情報

底本：「インドラの網」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年4月25日初版発行

1996（平成8）年6月20日再版発行

底本の親本：「【新】校本宮澤賢治全集 第九卷 童話」【#

「1」はローマ数字、「1-13-21」筑摩書房

1995（平成7）年6月発行

入力：浜野智

校正：浜野智

1999年1月31日公開

2011年2月15日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

インドラの網

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>